

SPECIAL REPORT

令和5年度酪農教育ファーム認証研修会開催

中央酪農会議は2月5日から全国3カ所で、「令和5年度酪農教育ファーム認証研修会」を開催した。研修会には、昨年12月の認証審査委員会で酪農教育ファームファシリテーターに仮認証された33人が出席した。各会場で2日間にわたり、酪農教育ファーム活動時の安全・衛生のポイントやワークショップの研修を受講した。受講者は4月から酪農教育ファームファシリテーターとして認証され、酪農教育ファーム活動に取り組むことになる。

1. 酪農情勢や酪農教育ファーム活動状況を説明

酪農教育ファーム認証研修会は2月5、6日の大阪を皮切りに、2月13、14日は札幌、3月11、12日に東京会場それぞれ開催した。各会場で主催者挨拶した星井久美子事務局次長は生乳需給の動向について、Jミルクが1月に公表した令和6年度の需給見通しにふれ、全国の生乳生産量は前年比0.3%増と前年を上回るものの、飲用乳価引き上げに伴う牛乳小売価格の値上げの影響で、飲用牛乳等向け処理量は1.4%減と前年割れが続くため、乳製品向け処理が増加し、脱脂粉乳の期末在庫量は国の在庫削減対策を実施しなければ22.6%増と積み増す見込みを示した。

また、酪農経営をめぐる情勢については、飼料価格の高止まりが続く中、指定団体は令和4年度から複数回の乳価引き上げを実施したものの、酪農家からは機動的な乳価値上げができないことや値上げ幅についてさまざまな意見が出ていると指摘した。農水省が昨年立ち上げた「適正な価格形成推進協議会」では、小売価格を生産コストに応じて機動的に変えることになると、価格上昇分を消費者に負担してもらうことになるため、酪農家など農業者と消費者の距離を縮める理解醸成活動が重要であることが話題となっていることを紹介した。

さらに、令和5年度に入って新型コロナウイルスが感染症法上の5類となり、酪農教育ファーム活動が活発化したものの、酪農体験学習の受け入れ団体数はコロナ禍以前の半数に留まっている状況も説明した。

2. 大阪会場

大阪会場では7人が受講した。講師の日本大学生物資源科学部の堀北哲也教授が1日目のワークショップ、2日目の酪農教育ファーム活動における安全・衛生に関する講演をそれぞれ担当した。

堀北教授はワークショップで、一般的にファシリテーターの役割とは相手に教えるのではなく、相手から気づきを「引き出す」ことだと指摘した。酪農教育ファームファシリテーターとして、酪農体験者が話しやすい場を作り、一方的に酪農のことを教えるのではなく、学びを支援する立場から、相手に問いかけて考えてもらい、気づいたことを引き出して共有し振り返ることが重要だと語った。

安全・衛生に関する講演では、本会議で制作した酪農体験学習マニュアルに掲載している体験者受け入れ時の安全対策をはじめ、万が一、事故が発生した場合の応急措置、衛生、環境美化対策のポイントを解説した。特に、過去に認証牧場で発生した事故の事例を紹介しながら、認証牧場に義務付けられている基準を満たした保険（施設賠償責任、生産物賠償責任保険）への加入が不可欠だと強調した（写真1）。



(写真1) 大阪会場での堀北教授による講演

3. 札幌会場

札幌会場には8人が出席する中、1日目のワークショップの講師はNPO法人いぶり自然学校の上田融代表理事が務めた。上田先生は普段、北海道で子どもたち

の自然体験や保護者を含めた野外活動のほか、馬や羊などを飼い、林の管理などを行っている。上田先生は、ファシリテーターとは「何かしないではいられなくなるように仕組む人だ。酪農教育ファームファシリテーターは、牛乳を飲まないでいられなくなるように促す人である」と自説を展開。酪農体験学習の場でのファシリテーションの進め方などを受講者に伝授した（写真2）。

2日目の安全・衛生の講演は、日本大学の堀北教授が講師を務め、大阪会場と同様に、酪農体験者の受け入れ時の安全、衛生対策のポイントなどを分かりやすく説明した。



（写真2）札幌会場でのワークショップ

4. 東京会場

東京会場は18人が参加し、1日目のワークショップは堀北教授が務めた。諸事情により、オンライン形式での進行となったが、大阪会場での対面形式と同様に、ファシリテーターとは相手から言葉を引き出す役割であることを受講者に考えてもらい、自ら行動してもらうプログラムを展開した（写真3）。



（写真3）東京会場でのオンライン形式ワークショップ



（写真4）東京会場での山村先生による講演

2日目の講演では、千葉県農業共済組合北部家畜診療所の山村文之介技術主査が講師を務め、平成30年に国内で発生した豚熱をきっかけに、農水省が家畜の飼養衛生管理基準を改正して防疫対策を強化したことや、酪農教育ファーム活動として牧場などに酪農体験者を受け入れる際の注意点を分かりやすく解説した（写真4）。

5. まとめ

今年度は3会場とも昨年のプログラム内容を変更し、初日のワークショップで参加者の緊張をほぐし、2日目の安全・衛生の講演を経て、最後にすべての受講者から研修会の感想や酪農教育ファームファシリテーター認証後の目標などを発表してもらった（写真5）。

受講者のアンケートでは、「ワークショップが初日にあつたので、他の方と交流しやすくなり、良いプログラムだった」「もう1度牛舎、農場、普段の行動なども見直して、安心して安全に多くの人に酪農の魅力を伝えていきたいと思った」などの意見があり、各会場の受講者からは酪農教育ファームファシリテーターとしての自覚が芽生えた研修会となった。



（写真5）受講者が研修会の感想などを発表